枕流キリシタン巡礼紀行（2015.7 五島、外海）

# 五島巡礼

空海は「辞本涯」と記して 700km 先の唐の国を目指し下五島・三井楽を後にした。小さい木造船は風浪に翻弄され難渋の結果の渡海であった。「本涯」とは日本のはてという意味である。ここから先は*空と海*以外何も見えない世界にあって太陽と夜空の星の光が仏の導きにみえたのかも知れない。五島から京の都に行くよりは 700km 西の中国の方が近い。五島列島は日本列島の形成とは異なり尖閣諸島も含め中国の大陸棚の東端上にある。それより東は崖になって深く落ち込み九州や沖縄との間は深い海溝になっている。昔々は中国と五島列島（隆起山脈）は陸続きだったそうで、氷河期が終わり海面が上昇して山脈の頂上が列島となった。中国は大陸棚上の島は自国領と考えているらしいので、彼らからすれば五島も尖閣も中国領となる。ちなみにアムールや鴨緑江のような河が国境の場合、国際的には国境線は河の真ん中らしいが中国は河の最深部と聞いている。そのためか近年の中国漁船の行動は目に余るものがある。地元で聞いた話によると最近も 450 隻（と聞こえたが）もの中国漁船が五島の入江に入り停泊したという。理由はしけによる緊急避難というので人道上から黙認しているが、近年沢山の中国漁船が五島周辺をうろついているという。国際条約での排他的経済水域（EZZ）は公海上 200 海里（約 370km）なのでそこまでは資源開発や漁業権は認められる。ただし大陸棚上に限っては 350 海里（約 650km）まで特例として公認されているが、あくまで公海上の話であって、五島は記紀にも記載されているれっきとした日本領だから、五島が中国の大陸棚の上にあるからといって五島周辺まできて自由気ままに走り回れるわけではない。そのためにも平素から日中間の意思疎通をよくしておくことが重要である。最近の日中，日韓の首脳間の反目には困ったものである。

邪馬台国・卑弥呼の時代にはもう中国と交易がおこなわれていたが、航路は博多から朝鮮半島に沿って北上する北回りであった。天智天皇 663 年（大化の改新は 645 年）白村江での敗戦（大和・百済の連合軍対唐・新羅連合軍との戦い）を契機に日本は唐と国交断絶、しかしその 33 年後持統天皇の時代に遣唐使を復活、ただし航路は博多―平戸―五島から中国大陸に直行する南回りが採用された。このルートはハイリスクではあったが、距離が短く天候さえ良ければ一週間で中国に渡れたという。五島は風待ち港として利用されることになったが、中国との交易が盛んになってくるとこの最果ての地が日本の表玄関に変っていったのである。福江に唐人町という地名があるように昔から中国の商人や倭寇が五島を拠点に活躍していた。その中で名を残した有名な人物が王直である。彼はジャンク船の船主として東支那海で活躍していたが、1540 年ころ福江に拠点を移し、日本と南蛮貿易の仲介をしていた。それによって財をなしたのが松浦氏で、彼は松浦氏から平戸に招かれ、ポルトガル船を平戸に手引きした。その結果平戸を通して西洋の文物が大量に入りだしたのである。やがてポルトガルは長崎に移り、交易の権利はオランダに譲渡されたがその跡地はオランダ商館資料館として現在ものこっている。鉄砲伝来は種子島からとされているが本来なら五島か平戸なのである。鉄砲を積んだポルトガル船が五島入港直前に難破し、漂流の末種子島に漂着したと言われている。かの坂本龍馬が設立した商社・亀山社中の船も長崎から薩摩に武器などを移送中暴風にあい、上五島沖で遭難している。龍馬が乗っていなかったのが幸いだが彼は上五島に来て船員らを手厚く弔い墓を建てている。

五島の教会群　　五島はイザナギ・イザナミが産んだ島の一つ（知か島）として古事記に出て来るが、実に島が多い。ざっと 140 ほど、そのうち人が住んでいるのは 30 ばかり。大きく分けて下五島と上五島になるが、下五島は福江島を中心とする五島市、上五島は中通島を中心に大小の島が連なる。それらの津々浦々に教会堂が建つ。長崎県には 130 余ほどの教会があるが、そのうちの 40%が五島にある。五島のキリスト教の歴史はザビエルが来日して 17 年後、五島福江領主・宇久純定の要請で伝道師ルイス・アルメイダと日本人伝道師ロレンソが来島（1566）、伝道を開始したのが始まりで福江と奥浦（今の堂崎教会の前身）に教会も建てられた。しかし徳川幕府の禁教令でそれまで増え続けたキリシタンも棄教して消滅したとされる。幕末のころ領主五島氏が五島の田畠開拓のため大村藩に領民の移住を要請したのが始まりで生活の苦しかった外海（長崎

市外海町)から多くの農民や漁民が応募して五島に渡ってきたのである。1776 年まず最初に 78 名が福江島の三井楽淵の元に入植した。その後 3 千人ほどが五島には楽な生活がまっていると期待に胸ふくらませて渡海した。しかし待っていたのは開けた平野ではなく地獄同然の山また山の開拓事業であった。リアス式の深く入り込んだ無数の入江に分散して入植させられたのである。

入植者は仏教徒を証明する宗札を携帯しなければならなかったが、実は彼らの多くは隠れキリシタンであった。幕末に至り彼らの村々に長崎に神父がやってきたニュースが入り、長崎のキリシタンと交流する人が出始めた。密かに神父も招かれ島を訪れるようになり、それが五島藩に知れるところとなり、藩はキリシタン狩を開始、棄教を迫り、応じなかったキリシタンを牢屋に閉じ込めたのである。明治政府が禁教令を解除したニュースもこの僻地にはすぐには届かず、中には 6 坪ほどの広さに 200 人も閉じ込めて 8 ヶ月も拷問したという。立錐の余地もないとはこのことで立ったまま衣服もはがされ、一日にサツマイモ一個、尿や便も垂れ流しの中で多くの人が亡くなっていった。では明治になってからしかも五島のような西の果てでどうしてこのような過酷な宗教的迫害が起きたのだろうか。単にキリシタン禁制に違反したからという単純な理由だけではないであろう。一説として当時吹き荒れた攘夷と無関係ではない。ペリー来航以来多くの外国船、所謂黒船が日本の周囲をうろつき始め、西海における最前線の夷狄防備を託された五島藩は福江に新しく石田城を築城した。攘夷を主張し下関で夷狄と一戦を交えた長州藩が倒幕後政治の実権をにぎって明治維新を断行、神道国家として天皇を絶対君主とする政治体制のもと廃仏稀釈を推進、特にキリスト教は異教としてキリシタンを厳しく取り締まったと考えられる。彼らが外国人(神父や宣教師)と密かにスパイ行為をしているのではないか疑って拷問した節もある。スペインが中南米やフィリピンなどで布教活動を植民地化の手段として利用したことを明治政府が懸念したこともあろう。しかしひどい弾圧が逆に外国政府から非難される結果となり、こんなことをしていては欧州の進んだ文明や技術を導入して富国強兵および近代国家への変革(明治維新)の妨げになることにようやく気付いて信教の自由を認めざるを得なくなった経緯がある。

しかし遅すぎたキリシタンの春が五島に訪れたのは、キリシタン禁制が解除された明治 6 年から遅れること四年の明治 10 年(1887)であった。晴れて信仰の自由を取り戻した村人たちは一斉に立ち上がり、自分たちの手で自分たちの小さな教会堂を建てることを誓い神に祈ったのである。五島にカトリックの教会が多いのはクリスチャンが多いこと(島民の十数%がカトリックに所属)に加えて島や交通不便な小村が多いためである。現在五島の教会数は 53 ほど。その教会建築の歴史を語る上で忘れてならない人物が教会建築の父と敬われている鉄川与助(1879-1976)である。

*教会建築の父・鉄川与助*　明治初期長崎などで建設されたカトリックの教会堂は外国の宣教師の設計によるものであるが、五島にも宣教師がやってくるようになり、宣教師の指導にしたがって島民たちも自分たちで木を削り煉瓦を積んでおらちの教会を建て始めるようになった。与助もそのうちの一人として教会建築を手伝った。彼は明治 12 年上五島の大工の棟梁の子として生まれた。教会建築を手伝ううちに西洋式建築に興味をもつようになり、建築に詳しい宣教師に本格的に教えを請うようになった。22 歳のころである。本格的に棟梁として独り立ちを決心して最初に師事した師がパリ外国宣教会のペルー神父である。神父からまず教わったのはカトリック教会でよく見られるリブ・ヴォールト式丸天井の設計法とそのための幾何学である。あのような曲線を組み合わせた天井の設計には図学や幾何学の知識は欠かせない。ところが与助のアイデアの素晴らしさは丸天井を作るのにお椀型の竹籠にしたことである。彼独特の鳥籠方式でその両面に藁入り粘土を塗り、その上を化粧の漆喰を塗ったのである。竹を編んで泥壁を作る工法は日本古来の得意とするもので、これなら素材も近くにあるし軽量かつ素人大工でも容易かつ早く出来る。しかも安価である。今も古い教会で時々漆喰が剥落して竹が見えるそうである。

彼の建築には他にも随所に和洋洋折衷方式が見られる。彼が 2 番目に師事したのが旧浦上教会堂を設計したプレ神父で、双塔様式の建築法を習得した。後に浦上教会の改築に関わり双塔式にした教会は原爆で破壊されたが片方の塔は何とか残り、現在原爆記念公園に移築されている。私は昨年長崎を訪れた際見たが無惨な姿であった。3 人目の師は長崎外海を拠点に広く布教活動を

行い、日本に骨を埋めたド・ロ神父である。神父から耐水性の漆喰の製法などを学んだ。私は今回五島の帰りに外海の出津教会と隣接のド・ロ神父記念館を訪れた。彼は三人の師に学びながら彼自身の創意工夫を加えて和洋融合の美しく堅固な教会堂建設に生涯を捧げた。享年 97 才、その間 50 余の教会建設に関わった。五島では 10 ヶ所の会堂を設計・施工しており、そのうちの代表的な木造(右横・冷水教会)、煉瓦造(下左・青砂ヶ浦)、石造 (下右・頭ヶ島)の教会を写真で紹介する。長崎県は教会群とその関連施設を世界遺産にと申請していたが、政府の一声で明治の産業革命遺産にすり替えられた。長崎県の方が早くから準備して世界遺産にほぼ確定していたのに突然横から割って入られたと地元の人は怒っていた。長崎県下の教会世界遺産候補のうち五島の候補教会は頭ヶ島教会と旧五輪教会、江上教会の三つである。他にも候補に値する教会はいくつかあるのに申請数に限りがあるのだろうか。もっとも五島に世界遺産が出来ても今のままでは道は狭いしホテルも少なく観光客への対応はとても出来ないと地元の人の弁である。

***長崎から下五島・福江へ***　大阪を朝早く発ち、長崎港から 1 時間半で行く福江直行の水中翼船に乗れば午後早くには福江に着く。しかし今回はバスのような窮屈でかつよく揺れる水中翼船を敬遠してフェリーに乗る。4 時間ほどかかるがよその港にも立ち寄るのでちょっとしたクルーズ気分が味わえる。今日の泊まりは福江市内であるが、念のためと思って観光パンフレットに載っていた旅館や民宿 10 軒ほどに予約の電話をするとみんな満室とかで断わられた。それで着いてから観光案内所で聞くことにし、翌日泊まる上五島だけでも確保すべく電話したがこちらは数軒目で予約できた。

四時半福江港着。下船後すぐ観光案内所で翌日午前の観光バスを予約、ついでに宿のことを聞くと港から徒歩 5 分のところに素泊まり専門の 3 千円で泊まれる旅館があると聞いた。電話してもらうと空いているとのこと。町の旅館に泊まるならむしろ素泊まりが良い。港にそってブラブラ歩く。江戸時代の石の灯台が格好良く建っている。宿はすぐ分かったが看板がなければ普通の民家である。二階の階段わきの 4 帖半の古ぼけた部屋にはすでにせんべー布団が敷いてある。しかし驚いたことにお茶や湯のポットも何もない。お茶はコンビニで買うしかない。シャワーとトイレは下にあるが浴衣も歯ブラシもタオルもない。部屋にテレビはあるものの 12 インチほどの懐かしいブラウン管式。横に 100 円玉をいれる箱がついているが有効かどうか分からないので見ないに限る。窓を開けると海からの風が入り結構涼しい。もう 6 時前だけれど太陽はまだ高い。大阪との時間差を実感する。早速貴重品とカメラだけ持って福江の石田城へ。(上から江戸時代の石灯台、石田城門、城内五島高校正門、五島資料館、武家屋敷街)

城は石垣と堀しか残っていないが、なかなかおもむきがある。幕末に建てられたころは三面海に囲まれていた。本丸跡は五島高校になっていて、クラブ活動を終えて帰る生徒たちがみんな「今日は」と礼儀正しく挨拶する。都会の高校生とは全然違う。話しかけると親切に応じてくれる。城内の資料館はもう閉っていたので明日に回すことにして近くの商店街で見つけた寿司屋に入る。寿司定食 1080 円(8 貫に味噌汁とサラダ付き)とあったのでそれを頼むと、あれは昼のサービス値段、夜は(中身は一緒で)400 円高くなるという。カウンターに座ると寿司を握りながらとこから来たか

と聞くので早朝大阪発って昼抜きで夕方着いたばかりと言うと、それは遠くからご苦労様と茶わん蒸しをサービスしてくれた。昼抜きと言ったから 400 円分サービスしてくれたのだろう。寿司ネタの魚はさすがに新鮮でおいしかった。

***堂崎教会と鬼岳***　　翌朝観光バスの出発時間 9:30 まで武家屋敷街を歩く。西海国立公園の中にある五島は見るべき景勝地も多く、せっかく来たのだからゆっくり見て回りたいところだが、今回は主な教会だけを見て回ることにした。ただし福江では五島市内遊覧観光バスが午前と午後の 2 コースが出ており、私は堂崎教会が入っている午前のコースに乗ることにした。堂崎教会を見た後景勝地の鐙瀬溶岩海岸と鬼岳を巡る。堂崎教会は福江の北方、直線距離で 10km ほどの奥浦湾の入り口に面して建つ。1880 年創建で五島キリシタン最初の拠点になった所である。今の建物は 1909 年に改築されたが、そのとき鉄川与助が関わっている。煉瓦造りの重厚な建物で、今はキリシタン資料館になっていて礼拝には使われていない。リアス式の深い入り江をもつ奥浦湾(下の写真)には近畿大と漁協の共同事業のマグロの養殖場がある。神経質なマグロの養殖にはこのような静かな環境が適しており大阪などに出荷されている由。五島は魚貝類の宝庫でもある。そういえば福江港には大きな冷凍トラックが何台も泊まっていた。鯨も歴史があり、江戸時代から紀州の漁師が多く移住してきているそうだ。

堂崎教会から福江にもどり、今度は南へ海岸線に沿って走ること 3~40 分、溶岩がごろごろしている鐙瀬海岸に到着する。展望台から見る海も鬼岳もなかなかの風景である。鬼岳は低い饅頭型の山で木が一本もなく芝生で覆われているがれっきとした火山である(右写真)。山頂には丸い噴火口が口を開けていると言う。山麓には温泉も出ている(酸化鉄系の赤い湯)。そのとき知ったのだが実はこの観光バスはここにある温泉ホテルが始発で、昨夜はここに泊まればよかったと後悔した。

**海からの教会巡り**　　海際に建つ教会が多い五島の教会巡りには海上タクシーを雇うのが便利らしいが一人だと高くつく。春から秋のシーズンの土日に限り 2 人以上だとガイド付きの海上タクシーが教会巡りながら上五島まで送ってくれる。実は出発の前日に運行会社に予約の電話を入れたが相客がなく出航しないとのことで半ばあきらめていたが、福江に着いた日に聞くと幸いにも三重県から来たという夫婦連れが申し込んだとのことで就航 OK になった。7800 円と少々高いが今回はこれを利用することにした。昼の 12 時半出発まで 1 時間近くあるので城内の五島歴史資料館を急いで見学する。おかげで今日も昼食をとるひまがなく売店でパンを買って船に乗る。海上タクシーなるものは初めてだが漁船の上に大型の車を載せたようなもので 5~6 人は乗れる。客 3 人、ガイドと運転手の計 5 人で港を出る。昨日今日と快晴で海は至って静か、白波などどこにも見えない。運転手もこんな日は一年に何日あるかどうかと言っていた。そのせいか運転手はしばしば運転台を離れロープを巻いたり縛ったり。少々蛇航しても広い海の上だから衝突するものがないから安全なんだろうけど、正直言って違反運転にならないのだろうか。そういえば救命胴衣も渡されなかったな。

船はまず久賀島の旧五輪教会に向かう。隣接して新五輪教会が新築され神父が巡回する月 1 回の礼拝は新で行われている。旧の方は国の重要文化財、1881 年創建で創建当初から現存する教会としては長崎の大浦天主堂についで古い。元は浜脇にあったのを 1931 年に解体して船でここに運ばれ再建されたもので世界遺産候補の一つでもある。この五輪地区は現在 2 家族しかなく、新・旧両方の保守や掃除は周辺から船でやってくる信者が交代でやっている。陸上からは車もやってこられない陸の孤島だが海からは前に小さな桟橋があるので船は容易に接岸できる。外観は和風の民家のようだが、内部はゴシック様式のリブ・ヴォールト(こうもり傘)式天井である(右写真)。なお、設計建築は鉄川与助とは無関係。

次に訪ねたのは隣りの奈留島にある江上教会。1918 年の木造建築。ここも国の重要文化財で世界遺産候補の一つ。ここは与助の設計施工である。シンプルだが美しい。続いて上五島・若松島の最先端の白崎断崖にあるキリシタン洞窟を船上から見る。明治初期のキリシタン弾圧を逃れてキリシタンが隠れ住んだ海蝕洞窟の穴がいくつかある。陸上からはとても近寄れない断崖絶壁で、今十字架と白亜のキリスト像が建っている。船はその岬を回り、中通島との間の水道を通り若松港に着く。ここで舟とガイドともお別れ。若松港にはタクシーが迎えに来てくれていて今夜の旅館まで送ってくれる。若松大橋からの海の風景が美しい。途中鏡のような入江の水面に映える中ノ浦教会に立ち寄る(左上)。同乗の夫婦は上五島の有川まで行くので私は途中の青方で下車。予約しておいた旅館は 2 食付き 6 千円と安くて小さいが新鮮な魚を中心になかなかおいしかった。宿に着いてすぐ近くのタクシー会社に出向き明日の教会巡りを依頼する。大曽教会—冷水教会—青砂ヶ浦教会—頭ヶ島教会—旧鯛ノ浦教会と巡って鯛ノ浦港まで送ってもらうことにした。3 時間はかかるとのことでメータより時間貸切の方が安いというので 1 万円で了承。運転手は教会にも詳しい人をとお願いする。

今日も快晴、朝 7 時半迎えの車に乗り、運転手の横に座り教会のことや鉄川与助の話を聞く。運転手は与助のことを鉄川先生と呼んでよく知っているので、聞くと与助の生まれた隣村の青砂ヶ浦教会の会員で五島の教会にも精通している。タクシー会社もなかなかいい人を運転手兼ガイドとしてつけてくれたと感謝。そう言えば昨日タクシー会社の社長?が「観光案内所を通さず直接会社にきて教会巡りを直接頼みにくる人はいないな」と言っていた。

冷水教会　　鉄川与助の生まれた村に近い冷水教会は彼の出世作で彼が1907年最初に設計・施工した木造の教会である。外観はシンプルだが中はリブ・ヴォールト式の天井を木目の美しい円柱が支える。(右上の写真。玄関上の六角形の鐘楼)

大曽教会　　青方の港から車で 5 分くらい走ると赤い煉瓦の美しい教会が目に飛び込んでくる。高い鐘楼の上に八角のドームを載せ白い十字架が青空に映える。元は 1879 年の創建だが、1916 年に改築された。改築された今の教会は鉄川与助の作品である。(上の写真)

青砂ヶ浦教会　国の重要文化財で冷水教会とは入江を挟んで対面の小高い丘の上に 1910 年に建てられた赤煉瓦の重厚な教会。煉瓦は当時佐世保から船で運ばれたという。神父が外国から取り寄せた教会堂に関する原書を参考に与助が設計施工したもの。頭ヶ島教会とともに与助の代表的作品となっている。丁度この日教会で運転手もよく知っている隣人のお葬式の準備が進められていた。運転手の家は教会から下った近くだと言っていた。有川の方へ下りながらここから与助が生まれだ村のお寺の前で車を止め、あの門も与助が造ったものだとのこと。和洋折衷の変わった門である。寺の墓地に鉄川一族の墓がある。(右上の下二枚は青砂ヶ浦教会の表と裏側の景観。裏側の六角堂は鐘楼?)

頭ヶ島教会　　頭ヶ島は有川港から東へ直線距離で 10km、道がくねっているから十数キロはある。今は橋がかかって陸続きになり便利になった。上五島にも飛行場をということでここ頭ヶ島に飛行場を作ってみたものの辺鄙すぎて乗客がなく今は閉鎖中とのこと。失政が失笑を買って一件落着。頭ヶ島教会は日本では珍しい石造である。献堂式は 1919 年。村人が近くの山から石を切り出し、こつこつ積みあげたもので工期はかなり長くかかっている。内部の天井は舟底式とこれも珍

しい造りで美しい花柄の絵が描かれている(上左。絵葉書のコピー)ため「花の御堂」とも呼ばれる。ステンドグラスもバラの花裳様をデザインしている。与助が施工した教会には花の装飾が多く、昨日見た中ノ浦教会も頭ケ島とは少し違うが船底型天井でその両側の壁に赤い色鮮やかな椿の花十字が描かれている。頭ケ島教会は国の重要文化財で世界遺産筆頭候補にランクされる。

旧鯛ノ浦教会　有川から車で 10 分余、鯛ノ浦港近くに建っている。旧というのは隣に新しく教会堂が建設されたためで、今は礼拝には使用されず図書館として利用されている。旧会堂は木造であるが玄関や鐘楼は煉瓦造りで外観はそのままである。ただし図書館として改修にあたって一部破損していた煉瓦の修復に原爆で破壊された浦上天主堂の煉瓦が再利用された。内部もほとんどそのまま保存されている(右写真)。

いささかあわただしい教会巡りを終えて鯛ノ浦港から長崎行きの水中翼船で長崎港へ直行、外海(そとめ)へ向かった。今は長崎市に編入されている外海であるが今も交通不便なところでバスも少ない。幕末まで外海は陸の孤島であったためキリシタンが隠れ住むには好適な土地であった。幕末ここから 3 千人もの人が新天地と信じた五島へ渡った。その後 1879 年(明治 12 年)ここに村人たちにとってまさに救世主となったド・ロ神父(1840~1914)がやってきた。住民の貧困を目の当たりにした彼はここに救助施設を作り、村人に小麦の植栽・製粉技術、印刷術や建築技術に鉄工技術、女性には織物技術や製麺技術を教えた。実は小麦粉に油(欧州ではオリーブ油を使用するが、その頃日本にはまだオリーブがなかったので椿油を使用した)を混ぜて製麺する所謂素麺のルーツはド・ロ神父であって、今でも外海では「ド・ロ素麺」として販売されている。彼は医学にも詳しく住民の医療にも尽くした。彼の遺物はド・ロ記念館に展示されているが、それらを見ても彼の功績の大きさが分かる。なお隣の出津(しず)教会は彼の設計である。そこから見る西海の海はきらきら輝いて美しかった。彼はここで過ごした 25 年の生涯を村人の救済に捧げ、西海を見下ろす丘の上の墓地に安らかに眠っている。

夕刻長崎に戻り、佐賀駅裏のビジネスホテルに投宿。翌朝、鳥栖―久留米―羽犬塚と乗りついで八女の町に行く。ここに九州最古の茶商、江戸時代創業の矢部屋許斐本家がある。日ごろ八女茶を取り寄せて愛用していることもあって一度行ってみたかったのである。ここでおいしい新茶の試飲をさせてもらい、新茶を一袋買う。バスで久留米に戻り久大線に乗って安井で降りる。ここは蔵の町でも有名で立派な庭や屋敷をもつ旧家がいくつかある。歩けば 30 分ほどの旧家を目指して歩き始めたが 10kg ほどのリュックが肩に食い込んで痛く、引き返しタクシーで行く。旧家を二軒訪ね、ぶらぶら蔵街を見ながら駅に帰ったたが、その日はとにかく暑く(TV で 35℃と言っていた)熱中症寸前ふらふらで駅に戻った。なにしろコンビニも自動販売機もない町で駅の自販機でようやく冷たいジュースにありついた。次は日田で降り、今夜の宿・杖立温泉行きのバスを待つ間、日田の駅前のスーパーで遅い昼食代りにパンとアイスクリームを買ってやっと一息ついた。杖立温泉は九州でも指折りの名湯である。歴史も古く、昔の人は杖をついてこんな山奥にまで湯治にやってきたのである。そして帰りは杖を置いて帰るほど病気が治ったと言い、杖立の名の由来となった。かつての名湯も今や迷湯になり下がった温泉も多い中、杖立温泉はいまだ現役の名湯である。

確かに泉質は良い。私も一辺に疲れがとれたように感じた。しかしかつての杖立温泉は日田の山林王たち(天領時代から日田杉の名産)の奥座敷と称されるほど繁盛したそうだが、彼らの没落と今や観光客も由布院や黒川温泉に流れて代りにやってきたのは閑古鳥だと宿の女将が言っていた。それなら閑古鳥の温泉蒸しを名物にしたらどうかと応えておいたが、夕食に出たのは日田牛の温泉蒸でこれは絶品だった。翌日日田にもどり日田の町を少し歩いてから中津行きのバスに乗る。乗客は私一人。運転手からいろんな話を聞いた。これも一人旅の良さである。久し振りに中津を歩いた。官兵衛ブームも過ぎてこちらも閑古鳥が城の上を舞っていた。でも中津には名物の鱧がまだ健在である。小倉から新幹線で帰阪、無事旅を終えた。

## はしやすめ

先般日本からユネスコに提出されていた「明治の産業革命遺産」が世界遺産に登録されることになった。本来世界遺産申請には政府は推薦すれど口をはさまずが原則。しかし過去には特に中東地域の遺産申請に国家間のいざこざがみられた。しかしにアジア地域で今回ほど政権が露骨に関与して対立した例はない。韓国だけを責めるわけではないが、日本政府のやり方もいささか強引である。ある新聞によれば現政権の方で今回の産業革命遺産をどうしても成立させたかった何か訳があったらしい。それで世界遺産の日本の委員が今年で任期終了し来年からいなくなる(韓国は残る)ので今年提案するのが得策と見て、先に予定されていた長崎の教会群を後回しにして明治の産業革命遺産を先に推薦したらしい。それにしても今回の遺産の中に今は埋もれて何も見えない佐賀県の「三重津海軍所跡」が入っている。それくらいなら京都のインクライン(日本で初めての水力発電、それで日本で初めて市電を走らせるなど数々の日本の近代化に貢献)が入らないのはおかしいという意見もある。また萩の松下村塾が指定されたがあれは元と異なる場所に(移築ではなく)再現されたもので遺産価値はないし、産業革命というテーマにもふさわしくないと言う人もいる。今回の政府のやり方について五島で聞いた話だが、長崎の教会群が世界遺産確実と信じて準備していた五島の人達にとっては鳶に烏で実に面白くない話。このことを先日大阪の長崎県事務所に用事で立ち寄った際にどう思うか聞いてみたが、事務員は今回長崎県から軍艦島やグラバー邸その他三菱の造船所などいくつか指定されたので長崎県としては言うことない、長崎の教会群もいずれ指定されるだろうとの話で、その辺は五島の人達の思いと少し温度差があるようだ。一方五島の人達にとって教会が世界遺産になると悩みの種も増えるとの話も聞いた。すなわち信者にとって教会は祈りの家であって観光資源ではない。世界遺産になると観光客が押し寄せてその対応が困難になる。五島のような小さな教会では観光客のために常時人を貼りつけることはできないし、かといって教会に鍵をかけたり、時間制限することもよろしくない(教会は来る人を拒まずいつでも開かれているのが本来の姿だから)。さらに最近マナーの悪い旅行者も目立つようになった。内陣(聖壇)に立ち入ったり、無遠慮に写真を撮ったり。最後は観光客の良心に委ねるしかないが、それでも何か壊されたり、盗まれたり不都合が起こるのも心配。信者にとっては世界遺産になるのは痛しかゆしとの話でもあった。五島の教会は原則内部は撮影禁止。

現政権の強引なやり方もさることながら狡猾なやり方も目に余る。来年のサミット開催地の決定もその好例である。開催地を公募で決めることは悪くはない。しかし決まったのはもともと応募していなかった三重県(伊勢、志摩)である。なんでか? 首相の腹の中には初めから伊勢ありきだったようだ。それで内閣府が三重県に至急応募するように説得したという。公募は民意を尊重したかのような見せかけのカモフラージュだったのか? それなら公募せずに堂々と伊勢志摩でやるんだと公言すればいいものを。首相にとってなぜ伊勢なのか。首相曰く「伊勢神宮は日本人の精神的基盤、ここに世界の首脳たちを招くことによって日本人の精神文化を理解してもらういい機会」と。伊勢神宮は皇室の祖神として古くから祭祀されてきたが、伊勢神宮と天皇家ならびに日本帝国との関係をはっきりと法制化したのが尊王攘夷を旨とした明治政府であって、大戦後は国家と神道の結びつきは解除され、今は伊勢神宮は天皇家の氏神様に過ぎない。江戸幕府はお伊勢参りというツアーを企画することによって大衆のエネルギーのガスぬきや一揆の回避に利用したように、安倍さんはまさかサミットを利用して世界の首脳を自分の政治思想に同調させようとの魂胆ではあるまいな? とにかく一国の総理がサミットで主脳を伊勢神宮に連れていくことは宗教を政治に利用した憲法違反ではないかと思うのは考え過ぎだろうか。メディアも何も言わないのが不思議である。今回の応募には広島が手を挙げていた。広島こそサミットにふさわしい場所、世界の首脳が打ち揃って広島を訪れ核兵器廃絶を誓う好機と多くの人が思ったはず。オバマさんも大統領としての立場上これまで広島を訪問したくても出来なかったかもしれないが、サミットなら出席せざるを得まい。むしろオバマさんも広島でやってくれたら行きやすいのにと思うかもしれない。今の安倍政権なら米国への気遣いから広島を選択することはまずありえないであろうが。戦争や武器のない社会の到来を祈って閑話終了。